

来ふらり62



村田 奈保

博士前期課程2年ドイツ文学専攻

この夏、私は見学と資料探しにドイツの大学図書館を訪ねました。ドイツでは大学は町にひとつというのが普通です。そのせいか、大学と町とが一体化していることが多いように思われます。最初に訪れたハイデルベルクは小さな古い大学町で、図書館も旧市街の町並みに溶け込んだ荘重なものでした。またシュツットガルトは産業の中心をなす大都市で、大学は理工系が盛んです。大学図書館は雑誌類が充実していて、バックナンバーの古いものを自由に見ることができました。ふたつの町を巡って最後に訪れたフライブルクは、古い有名な大学町で学生と観光客が溢れていました。車道に面して立つ大学図書館は、入ってすぐのところにレファレンスがあり、フロアに検索用端末が数十台並んでいます。もう夏休みのはずでしたが、利用者が多く混み合っていました。レファレンスのブースの前には学生の列ができていて、係の人がひとりひとりに丁寧に対応しています。

「私はこの学生ではないのですが、本を見ることはできますか?」「もちろんですよ。あなたはどこで勉強しているのですか? ああ、日本の東京ですか」といったやりとりの後、自分が研究しているトーマス・マン関係の本が見たいと言うと、それなら5階へ行くとエレベータを指さしました。「ただし、背負っているリュックは預けて行ってね。そうしたら誰でも入れますよ」

クロークにリュックを預けて上へ上がり、ドイツ文学研究の棚をひと通り眺めてから2・3冊本を取り出して近くの机に着きました。席は割合に埋まっていて、眉間にしわを寄せてレポートを書く人もいれば、突っ伏して寝ている人もいます。下のフロアは賑やかでしたが、ここは人が多いのに静かでした。私はコピーを少しとってから閲覧室に別れを告げました。

こうして私の図書館巡りは終わったのですが、訪れるすべての人に対して図書館が開かれていたことが非常に印象的でした。基本的には、誰でも閲覧しレファレンスを受けることができます。ドイツを旅行していて、疲れたり暇をもてあましたりしたときは、図書館に足を向けてみてはどうでしょうか。本を読んだり新聞を眺めたりしながら、腰を下ろしてゆっくりくつろぐ時間をもつことができるといいでしょう。

図書館アルバイト体験記

福原 美穂子

博士前期課程2年ドイツ文学専攻

図書館でアルバイトを始めて約3年半、思い返してみればいろいろな体験をしました。そのうちのほんの一部をご紹介します。

最初に覚えた仕事は「配架点検」と呼ばれるもので、本棚を整理するという仕事。シンプルですがまめな作業で、本が所定の位置に順番通り並んでいるか1冊ずつ確認し、きれいに並べるといった作業をします。この仕事の利点は、未知の本との出会いがあること。仕事を続けているといつかは1階フロアのすべての本と対面することになるので、ふだん全く近寄らない書架にも手を触れることになり、本の場所も覚え、自分で本を探すときは大変スムーズです。ただしアルバイトの時間外でも、また他の図書館に行っても、本棚の前に立って本がきれいに並んでいないと、つい「配架点検」をしたくなるというマイナス面もあることを付け加えておきましょう。

次に覚えたのは1階カウンター業務です。この仕事を覚えたころは、貸出・返却はすべて手作業でしたが、段階的にコンピュータ処理が取り入れられ、今では多くの本が「ピッ、ピッ」で貸し借りができて便利になりました。カウンター業務の利点(?)は、学科などの知り合いが本を借りにきて「あらー、福原さん、図書館で働いていたの」と声を掛けてくれること。少しは賢そうに見えるのではないのでしょうか? 興味を抱いて図書館でアルバイトを始めた友人もいます。

他にも、書庫で埃にまみれながらの作業や、2階レファレンス・カウンター内でのお手伝い、コンピュータ検索のしかたの説明係なども経験しました。とにかく本好きにとっては良いこと尽くしのアルバイトです。

図書館に期待する

菊池 庸介

博士後期課程三年日本文学専攻



私は日本の古典文芸を研究しており、その中でも活字化されていない本が特に多いジャンルを専攻しているため、学習院に限らず多くの所蔵機関に原本（ここでは和綴しの古典籍を指す）を見に行かなければならない。その時いつも、各所蔵機関の原本の扱いについて、興味を持ってしまふ。古典籍には、資料的価値以外にも歴史的・美術的価値が付加されるため、各機関によって扱いが異なってくる。私の研究対象とする本は、資料的以外にはほとんど価値のつかない類の本ではあるが、これらの扱いも各所蔵機関によってさまざまである。厳しい例では、古典籍全般貴重書扱いを掲げる機関があり、閲覧の手続きも面倒であったり（閲覧許可が下りないこともある）、他にもいろいろな制約がつく。その対極に、地方の公立図書館によく見られるものだが、閲覧予約も要らずにすぐ本を出してもらえ、「コピーまでさせてくれるような所がある。

古典籍の扱いは各所蔵機関の考えがあつてのこ

とだから、一概に善し悪しを決めることはできない。ただ、古典文学を研究する者にとっては本の第一義はやはり持っているものではなくて見るもの、読むものである。実地に手に取って見られなくても、どのような形であれ内容が公開されるのがより望ましい。話に聞いたことで真偽を確かめたわけではないが、最近、関西のある大学では、インターネットの画像上でその大学図書館の所蔵している古典籍の全ページを公開しているところである。これが本当たしたら、私はその大学図書館のオープンな姿勢に賛意を表したい。これならいわゆる貴重書でも原本を傷めることなく本文を読めるし、誰でも閲覧が容易にできる。書誌学的な調査は難しいが、そのような時には実地に行けば済むことである。実現にあたっては、技術上や予算上、その他いろいろな問題が出てくるかも知れないが、学習院を始めとする多くの所蔵機関でも、古典籍が容易に見られれば、と思つ。

お 薦 め
し た い
図 書 館

石井杏奈

理学部物理学科4年

突然ですが、皆さんは大学図書館を何に利用していますか？ 本や新聞やメールを読みに来る人、暇つぶしの人、待ち合わせに使う人、テスト前に頼りになるあの人を探しに来る人...さまざまですね。講義で出題されたレポートを書くために本を探しに来る人も大勢いますが、中には誰かにひと足先に借りられてしまって困っている人もいます。今回はそんな人のために、またほかの図書館に行くのが面倒臭いと思っている人のために、お薦めの図書館を紹介したいと思います。



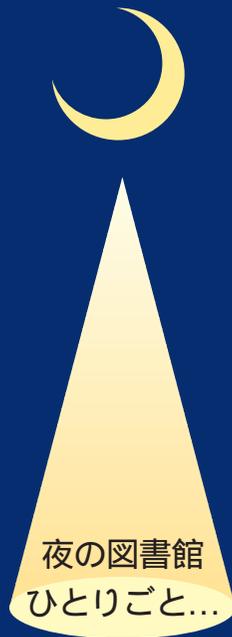
大学から近い図書館へ行きたい人なら、雑司ヶ谷図書館と新宿区立中央図書館がお薦めです。雑司ヶ谷図書館は所蔵冊数の少ないのが悩みですが、大学から歩いて行けます。また、新宿区立中央図書館の方は、高田馬場駅から10分ほど歩きますが、所蔵冊数も利用する人も多いです。月曜日以外の平日は夜8時まで開いているのでなかなか便利です。

人込みの中を避けたいなら、都立の日比谷図書館と中央図書館が良いでしょう。日比谷図書館はその名の通り日比谷公園内にあります。本の返却期限は1か月と長く、返すのを忘れてしまうほどです。一方、広尾の中央図書館は、建物がきれいで所蔵冊数も多いのですが、本が借りられないので皆コピーしています。

お薦めの図書館、皆さんも暇な時間に自分の気に入った図書館を見つけてみてください。

子曰く「故きを温ねて新しきを
知れば、以て師と為る可し」

8月中旬、ローマ以北のイタリアを訪ねて来ました。行く先々の都市、町そして村々で、「伝説の時代」の先住民エトルリア人の一部族と言われる先人が地の利を得て築いたローマの礎からの遺産を大切に保存し、戦火や災害、風雪によって傷ついた箇所を修復し、未来へ受け継ぐための並々ならぬ努力の姿を目のあたりにし、“カルチャーショック”にも似た感動を受けました。《フォロ・ロマーノ》では今も大規模な発掘作業が続いており、まさに新しきを知るために故きを温めているに違いないと思いました。



野島勇治 派遣職員

図書館は、先人から現代に至る英知の宝庫そのもの、まさに故きを究め、新しきを知り、未来を探究する場であると言えます。調べ物や、試験勉強のときはもちろん、折にふれ来館して図書館の膨大な所蔵資料を上手にそして効果的に利用して欲しいと思います。われわれも微力ながら皆さんの図書館活用のお手伝いに精一杯頑張りたいと思っています。

ひとつだけお願いがあります。書庫資料を請求する時は、「請求記号」をよく確かめて、正確に記入して下さるようお願いします。1分1秒でも早く資料をお渡しするために。もうひとつ、午後5時過ぎ、図書館は静かです。空いていますよ！